

## 唯一神の分有

—ライヒ&amp;コロットの《ザ・ケイヴ》から

**The "Partage" of One and Only God:  
Reich and Korot's 《The Cave》**

西谷修

NISHITANI Osamu

スティーヴ・ライヒ& ベリル・コロット  
《ザ・ケイヴ》

9月18日－21日

渋谷・Bunkamura シアターコクーン  
Steve Reich & Beryl Korot "THE CAVE"  
September 18－21  
Bunkamura, Shibuya

スティーヴ・ライヒとベリル・コロットによるドキュメンタリー・ミュージック・ビデオ・シアター《ザ・ケイヴ》は、ビデオ・アートと現代音楽のアンサンブルによってまったく新しいかたちの劇場芸術を呈示したという点で、きわめて印象深い作品だった。古典的な規範の枠を失って久しい現代音楽も、ビデオという生まれて間もない表現の媒体と結合して、羽ばたくための空気を見出したかのようなのだ。ともかく、テクノロジーの生み出す新しい媒体と、時代のかたちを模索する音楽とがみごとに協和して、映画でもオペラでもたんなるインスタレーションでもない、ひとつの総合的な表現形態を生み出した。

この作品はのっけからすでに古典の風格をそなえているが、それは技術的なレベルでは実験以外のなにものでもないこの試みが、テクノロジーのもたらす技術的可能性とか、美的配慮以上の、もっと一般的で現実的なモチーフに支えられているからである。それが作品の出発点となったテーマの選び方に端的に表われている。

いままさにパレスチナ自治をめぐる係争の焦点となっている、ヨルダン川西岸地区のヘブロン、そこにあるユダヤ教とイスラームの共通の聖地マクペラの洞穴をテーマにすることは、制作者たちにとって芸術的試みがどういふものと考えられているかをすでにして物語っている。

ビデオという手段には、ドキュメンテーションという機能が伴い、それは必然的に何らかのレベルで「現実」を取り込むことになるし、楽器の作り出す人工的で技巧的な音や旋律を前提とせず、世界のノイズや人の声を音楽化するライヒの手法は、音楽をいわば日常の実存の共振といった平面に引き出してくる。だから、もともとそういう両者の協和から生まれてくるものには、新しい媒介を経たある〈現実〉(ヴァーチャルな、と言うべきかもしれない)の次元が構成されることが期待されるが、その〈ヴァーチャル〉が、ここでは、かの洞穴をめぐる文化的〈記憶〉によってアクチュアライズされている。

だからこの作品は、テクノロジーの想定させる抽象的なヴィジョンやメカニカルな感覚の領域へと人を見まわすのではなく、世界の具体的な現実や記憶の領域へと開かれて、むしろなつかしくさえある新鮮な驚きをもたらすのだ。

"I have no idea"



ベリル・コロットの作品リストには《ダッハウ1974》があり、ステーヴ・ライヒには《ディアレント・トレインズ》があることを見ると、アメリカ在住ユダヤ人であるこの二人の現代アーティストが、これまでもユダヤ人の〈記憶〉をモチーフにした作品を作ってきたことがわかるが、今度の作品はその〈記憶〉を「シヨアー」を超えて「民族の起源」まで、つまり「啓典の民の父祖」アブラハムにまで遡らせている。

といっても、アブラハムその人がテーマではない。むしろ〈啓典〉の伝統を引き継いで現代に生きる人びとが、アブラハムの象徴する〈起源〉とそれからの分岐をどのように記憶しているかという、その〈記憶〉の交錯の絵模様がこの作品のマチエールになっている。

パレスチナをめぐって対立する二つの民、ユダヤ人とアラブ人は、すでに50年にわたって紛糾した抗争の渦中にある。けれどもこの二つの民は、じつは「啓典の民」として、同じ〈父〉から発した〈兄弟〉である。だからこの抗争は神話的次元に広がってしまう。しかもこの〈起源〉は、4000年を経たと言われるいまも、モスクに覆われた洞穴として、具体的な場所として存続しており、ユダヤ人とアラブ人の、ユダヤ教徒とムスリムの対立の、宿命のエンブレムであるかのように分有されている。その〈分有〉、洞穴の象徴する〈分割＝分有〉そのものが、この作品のテーマといえばテーマだ。

コロットとライヒの作品は、いまマチエールと言った説話的な面だけで語りうるものではない。だがここでは、その部分にかぎってコメントしてみたい。

「あなたにとってアブラハムとは誰か」「サラとは」「イサクとは」「イシュマエルとは」という質問にさまざま人が答えて、各人における共同の文化的記憶を語らせるインタビューが、ここでは3幕構成にまとめられている。まず第1幕はユダヤ人たちの解答、第2幕はアラブ人たちのそれが素材になる。かれらはともに、洞穴という〈起源〉の現存の間近に住む人たちだ。そして第3幕は、その現存の〈起源〉にもはや現実感をもたない、遠く離れたアメリカ合衆国の人びとの多様な答えが並んでいる。

洞穴の間近にいる人びとの記憶は、ユダヤ人の場合でもアラブ人でも、かれらの現実である現在の対立状況から、ただちに垂直に神話的時間を遡って〈起源〉の物語へと直行する。だから第1幕、第2

幕が平行する記憶の縦軸を構成するとするなら、第3幕には糸が切れた凧のような、時間がほつれて脱神話化された物語のイメージだけが漂うことになる。神話的時間は途絶え、〈起源〉への遡行はどこかではぐらかされてしまう。おそらくそれは、世界の多くの地での聖書の物語の在りよう基本的には変わらない。だから、第1部と第2部で解きほぐされより合わされる縦糸の交錯は、第3部でいわばほつれて横に広がる現在に相対化されながらつなげられることになる。言い換えれば第3幕は、第1幕、第2幕で、記憶の喚起される場所の状況から当然のように設定される〈起源〉へのヴェクトルが、すでに絶対的ではありえないこと、〈記憶〉が場所の規定によって励起されるということ、〈記憶〉の散逸によって逆に照らし出している。

おそらくそこには、二つのタイプのアンデンティティの作り方が反映されている。ひとつは〈歴史〉に帰属することによって作られるアイデンティティ、もうひとつは共時的な文化複合が作るアイデンティティだ。後者は歴史・地理的な〈起源〉からの離脱やその喪失を前提としている。アメリカはほかでもない移民たちが作り(そのなかにはもちろんおびたしい数のアフリカからの強制移民もいた)、移民によって育ってきた国なのだから。

ユダヤ人はもともと〈離脱〉や〈離散〉を生存の基本的なモードとしてきたが、「世界の脱魔術化」が言われた20世紀に、まさに近代世界の「脱魔術化」を担ったがゆえにユダヤ人は、どこにいてもその〈起源〉に暴力的に送り返され根絶の脅威にさらされるという経験をもった。その記憶は、〈アウシュヴィッツ〉の時代を現実的に経験していない戦後育ちの世代においてこそ、トラウマとしての呪縛をもっている。この作品の共同制作者であるコロットとライヒは、一面では〈起源〉を解体するアメリカの住民であるにもかかわらず、〈離脱〉を許さない「シヨアー」の記憶によって避けがたく〈民族〉へと、その〈起源〉の物語へと送り返される。

だからこの作品の、〈信〉の強度をもつ歴史の縦糸と、拡散する現在を編む横糸とは、コロットやライヒの存在の条件を織りなすと同時に、現在の世界のアイデンティティをめぐると問いの織物の在りようをも示している。

ただ、ヘブロンをめぐる「パレスチナ問題」ということで言えば、ここには大きな「不在」が目につかざるをえない。それはアブラハムを父祖とするもうひとつの伝統、キリスト教ヨーロッパである。この50年、血を流し合い宿命的に憎悪を深めてきたのはパレスチナのユダヤ人とアラブ人だが、古くから対立し合ってきたのは、じつはこの二つの民族ではない。ユダヤ人を長きにわたって迫害し、ユダヤ人にイスラエル建国を迫らせたのはキリスト教ヨーロッパだったし、それ以前にはユダヤ人はイスラーム世界に住処を見出してきたのである。もちろんイスラーム世界では、ユダヤ教を奉ずる人びとは異教徒だった。だがこの異教徒たちはキリスト教ヨーロッパにおけるほど過酷な迫害や追放には遭わなかった。よく知られているように、7世紀末以来800年近くに及んだイスラーム勢力のイベリア半島支配のあいだ、ユダヤ人は社会的役割を得て繁栄もしたが、それをヨーロッパから追放しようとしたのはキリスト教徒の勢力なのである。そして、そこを逃れた多くのユダヤ人は再び地中海東方のイスラーム世界に逃れた。そこではユダヤ人は少なくともユダヤ人として(つまり異教徒として差別されながらも)住むことができた。

それに、もともとムハンマドが新しい一神教の信仰を興すとき、原理的に否認したのはキリスト教であって、ユダヤ教ではなかった。むしろかれはイシュマエルがアラブ人の祖だという旧約聖書の記述に依拠することで、みずからの信仰の正統性とアラブ人の運命をユダヤ人の聖典に託しさえしたのである。もちろん、当時、現在のような民族意識があったわけではないだろう。いまで言う民族意識は、宗教意識としてイスラーム成立以後ははっきりしたかたちをとったと言ったほうがいい。つまり、ムハンマドの新しい信仰創設以降、ユダヤ教徒やキリスト教徒に混じって、ムスリムとしてのアラブ人が地中海に登場するのだ。そしてもう一度確認しておけば、ムハンマドが一神教において否認したのはイエスを「神の子」とするキリスト教であって、ユダヤ教ではなかった。砂漠に棄てられ、聖書から姿を消すイシュマエルの系譜にアラブ人を位置づけることで、みずからに、キリスト教化した一神教をふたたび「唯一の神への絶対帰依(それがイスラームの語義だ)」に戻す召命を与える、というのが一神教におけるムハンマドの在りようだった。

だから間違えてはいけないのは、古代のアブラハム以来、つまりこの族長の妻サラと侍女ハガルの確執と、それぞれの子イサクとイシュマエルの運命の分岐以来、それぞれを祖とするユダヤ人とアラブ人との対立が続いてきたのではけつてない、ということだ。イスラームの発祥はユダヤ教からキリスト教が分岐してから600年も経つてからのことだ。そしてそのときにも、イスラームの信仰は旧約聖書に起源を定めることで、むしろユダヤ教的なものへの復帰という性格をもっていた。そのことは、イスラーム創設当時の歴史的現実のなかにもはっきりと書き込まれている。

イスラームを不倶戴天の敵とみなすのはキリスト教ヨーロッパである。というのもキリスト教ヨーロッパは、イスラーム勢力が地中海世界をほぼ制圧しイベリア半島さえ支配した時代に、それへの脅威を揺籃として危機のなかに生まれたからだ。ここで言うキリスト教ヨーロッパとは、後の西ヨーロッパに連なる世界だが、それは古代キリスト教ローマの崩壊の後に、イスラーム世界の地中海制圧ののちに形成される。そのときにはエルサレムはすでになく、教会は東西に分裂し、双方ともイスラームの進出に脅かされていた。そのためキリスト教世界には、脅威を内在化させたイスラームの否定的な表象が作りだされ、ムハンマドは26人の妾を囲う女衞のペテン師マホメットということになり、「淫邪邪教」への憎悪と敵意が作り出された。それ以来、十字軍の遠征を経て近代の植民地支配の時代にいたるまで、キリスト教ヨーロッパはアラブ・イスラームと千年以上にわたる抗争を繰り返してきた。そのことをつい最近思い出させたのが、西側世界によるイラク征伐としての湾岸戦争である。

そのキリスト教ヨーロッパが、「領土回復」と「宗教的浄化」の運動によってイスラーム勢力をイベリア半島から放逐し、このついでにユダヤ教徒をも追放したのである。その後の歴史はよく知られている。ヨーロッパではユダヤ人はゲットーに押し込められ、やがてフランス革命によって市民権を得るや、今度は政教分離の市民社会で科学主義によって「人種化」され、改宗によっても変えようのない「セム人」として、人種的差別を受けるようになる(日本で誤って「反ユダヤ主義」と訳されている語は、じつは「反セム主義」であり、昔からあったものではなく19世紀

にできた人種主義用語だということは確認しておいたほうがよいだろう)。その極みが、ナチス・ドイツとその同調者によって実行されたヨーロッパからのユダヤ人一掃の計画だった。

ヨーロッパ諸国は近代に国民国家の体制をとるが、伝統的に土地との結びつきをもたず、国家への帰属意識が薄いとみなされたユダヤ人は、流浪の民として不信感を引き起こす「異邦人」だった。そしてそれを根拠に迫害されたユダヤ人に、シオニズムと呼ばれる強固なナショナリズムを植えつけたのはヨーロッパ世界だ。ヨーロッパ諸国に後押しされたこのシオニズムが、パレスチナの地に大挙してユダヤ人の移住を推進したときから、そして決定的には第二次世界大戦後のイスラエル建国以後、ユダヤ人とアラブ人は不倶戴天の敵になったのである。そこはもともと無人の地ではなく、主としてアラブ系の人びとが住んでいたからだ。そして土地を奪われ、住処をなくした人びとが難民として「パレスチナ人」というカテゴリーで生みだされた。こうしてひとつの土地をめぐる抗争が起り、それがまさしく二つの一神教によって分有される象徴的地であったため、この抗争はその原因を作り出したキリスト教ヨーロッパの歴史を遡るのではなく、ただちに神話的次元に飛躍して、アブラハム以来4000年の確執ということにされてしまう。

この確執にはキリスト教ヨーロッパの入る余地はなく、キリスト教ヨーロッパはみごとにゲームからすり抜けてしまう。だから現在のアラブ—イスラエルの対立を(啓典)に基づく対立とみなすなら、それは歴史と政治の問題を宗教的神話にすり替えて隠蔽することになる。そしてほとんど近代ヨーロッパの歴史によって戦略的に作られたと言ってもいいパレスチナの悲劇を、当事者同士の宿命にすり替えてしまうことになる。そうして「ユダヤ人問題」という宿痾をついに厄介ばらいしたヨーロッパの歴史そのものを不問に付すことになるのだ。

その意味では、この作品のナラティブな部分は、ユダヤ人とアラブ人の対比を軸に構成されている点で、みごとにこの畏にはまっていると言ってもいい。「洞窟」への入り口がいまユダヤ人用とアラブ人用に分けられ、その分離地点をイスラエル兵が警備する映像が映し出されても、50年の対立を一挙に4000年の起源に遡らせてしまうナイーヴさが目立

つただけだ。じつは、そこで飛び越えられた時間のうちにこそ悲劇の由来は隠されているというのに。

ただ、歴史を遡ることによって不正の在りかを糺すことよりも、現在の纏れた状況を所与として、そこから和解の可能性を求めようとするなら、このヴィデオ音楽作品が全体で示しているように、神話への飛躍は対立する両者が何を分かちあっているかを確認することで、和解の条件を作り出すことになるのかもしれない。

第3部のアメリカ人たちへのインタヴューのなかで、「アブラハムとは誰か」と問われた、リチャード・セラは、「エイブラハム・リンカーン高校しか思いつかない」と言い、ある女性は「イシュマエルとは誰か」と問われて、『モビー・ディック』の「おれをイシュマエルと呼んでくれ」というせりふを思い浮かべ、それが旧約聖書に由来する名だということを、後になって笑いながら思い出す。この地では、祖先が大西洋を渡ったとき、聖書を携えてはきたが、それは大統領就任式や宣誓の儀式のための道具だてで、古来の民の記憶など洗い流してきたかのような楽天的なそぶりを見せる。たしかにこの国(合衆国)の人びとは故郷を捨てた、あるいは新しい故郷を築いた根っからの移住者たちなのだ。

だが、その楽天性にもひとりの青年の「まったく知らないね」という返事でわずかに影がさす。それは聖書にまったく関係のないインディアンの青年だった。ここにはすべてが一神教の民ではないという抗議が響いているような気がする。一神教の民でないものに、アブラハムが何の関係があるかと。このとき初めて、不在のヨーロッパもわずかに顔を出す。というのは一神教を世界に広め、アブラハムが誰かを教育してきたのはキリスト教ヨーロッパだったから。

そしてこの作品にある一種の「予定調和」に綻びを穿つのもこのインディアンの言葉なのだが、もちろん、この作品はこの点をそれ以上深追いはいはしない。

ともかくこれは「一神教の家族」の物語である。もう一度この「家族」の事情を確認しておこう。(唯一の神)を奉じるヘブライ人がいた。かれらは自分たちを神に選ばれた民とみなしていたが、そこから「新しい契約」を信仰する分派が生まれた。この「新しい契約」は自分を「神の子」であり救世主だと称す

る者によってもたらされたが、その「契約」によれば、神の前に万人は平等なのだ。その教義によってキリスト教は民族を選ばない「普遍的(カトリック)」宗教となり、やがて「旧い契約」に基づく信仰を周辺に追いやっていった。

「新しい契約」はその正統性を「旧い契約」の預言に基づいて立てている。福音書のイエスの言葉や事績はつねに「旧約」に参照され、預言の実現とされるし、〈父〉なる神によって人間の罪をあがなうための〈生贄〉とされるイエスそのものが、アブラハムによって生贄の祭壇に縛められるイサクの反復である。その「新約」は信仰を全人類へと開くことで、「旧約」の〈部族の神〉を普遍的な〈唯一神〉へと更新する。そしてその〈唯一神〉の観念は、長い論争を経て当然ながらユダヤ教の神学にも影響を与えてゆくことになる。

イスラームはそれとはまったく違ったかたちで誕生した。この信仰だけは開祖をひとりの具体的な人物として特定できるし、その成立の経緯も歴史的に知られている。ムハンマドは、かれが「無明時代」と呼ぶアラブ世界の混乱に終止符を打つために、〈唯一神〉の信仰を打ち立てようとした。ただしそれはユダヤ教でもキリスト教でもない無限定の〈唯一神〉への帰依だ。けれどもそれは旧約聖書の記述する神と違うわけではない。というより、ムハンマドに〈唯一神〉の観念を与えたのは、すでにその当時アラビア半島にも浸透していたユダヤ教やキリスト教(とくに異端とされた、キリストの神性を認めない単性論派)だった。だからかれは聖書の記述をそのまま受け入れ、あるいはそれに依拠して、自分たちアラブ人をアブラハムの「捨て子」イシュマエルの系譜の上に位置づけたのだ。そのことはアラブ人を、独自のかたちで一神教文化に統合することを意味する。

いまさら言うまでもないが、ユダヤ教とキリスト教とイスラームという三つの違う一神教がある、というのは正確ではない。これはある意味で同じ一神教なのであり、同じ〈唯一の神〉を分有している。というのも〈唯一神〉はあくまで〈唯一〉であって、それが何種類もあるわけではないからだ。論理的にそう言えるだけでなく、実際かれらは同じ「旧約」の神を共有しているのだ。違うのは、基本的に、ユダヤ教が「アブラハムの神、モーセの神」との「選び」と「契約」を核にした信仰であるのに対し、キリスト教は

「神の子」イエスによる「原罪」のあがないを信じる信仰であり、イスラームはイエスの神性を否定し、人間との間に架け橋のない超越神の前に身を投げ出す「絶対帰依」の教えだということだ。〈唯一の神〉は同じだが、つまり〈神〉は一つしかないが、その〈神〉との関係の構想のしかたがこの三種の信仰を隔てている。

《ザ・ケイヴ》で、五つの大型スクリーンに聖書やコーランの言葉がいくつもの言語でタイピングされる。英語、ドイツ語、フランス語、ときにヘブライ語、そしてアラビア語(日本ヴァージョンでは、日本語のための特設スクリーンがいちばん上にある)。日本語で「アラー」と表記されるとき、英語では "Allah", ドイツ語では "Gott", フランス語では "Dieu" という文字がスクリーンに刻まれる。これはどういうことなのか。そこにどういう配慮があるのかはわからないが、"God" や "Dieu" が英語とフランス語で「同じもの」を指しているとするれば、アラビア語の発音を模して "Allah" と表記されるものも、やはり「同じもの」を指しているのである。"Allah" のフランス語訳は "Dieu" であるように、その日本語訳は「神」で十分なはずだが、「Allah」だけを「アラー」と表記するところには、すでに西欧伝来のイスラームに対するフィルターがかかっている。それが信仰の違いを明確化するのに役立つものであるのか、〈唯一神〉の分有を隠蔽するためのものであるのかは、いつも両義的なままだ。

ともかく、アブラハムの家族の物語はそのまま〈一神教家族〉の系譜構成の物語であり、その物語が母こそ違え同じ父の子であるとはっきり語っている以上、イサクとイシュマエルの子孫たち、ユダヤ人とアラブ人は自他ともに認める「兄弟」なのである。もつとも、それだからといってそれが「和解」の約束になるわけではない。というのも、この〈一神教〉の一族は、最初の兄弟(アダムとイヴの息子、カインとアベル)からして殺しあう運命にあるからだ。それにイサクの息子、双子の兄弟のエサウとヤコブもまた争いあう(この場合は和解するが)。

それに、聖書に遡って「和解」の基盤が確認されるとしても、それでは〈一神教家族〉のうちでの平和しか保証されない。キリスト教も含めたこの〈一神教家族〉と、〈唯一の神〉も家族的系譜も共有しない人びととの「和解」はどのようにして見出されるのか、

それはこの作品のモチーフを超える問題だが、第3幕のインディアン青年の答えによってわずかに触れながら背を向けている間いでもある。

もちろんこの作品では、聖書の記述そのものが問題なのではない。むしろ現代に生きる人びとが、アブラハムの記憶をどのように共有しているかということだ。ある人びとはアブラハムを聖書の重要な登場人物と考えている。そして聖書に語られているのは、ひとつの民の歴史だとされている。だからある人びとにとっては、アブラハムは歴史上の實在の人物である。伝説でも神話でもなく、この家族の物語は歴史的事実だとみなされているのだ。ユダヤ人にはそう考える人が多く、その意味ではユダヤ人には「歴史的民族」なのである。またある人びとにとっては、實在だろうが伝説上の人物だろうが、それはかれらにとってよく知った映画のヒーローと変わらない。アブラハムが實在の人物か、聖書という物語の登場人物なのか、あるいはもつともポピュラーな物語のヒーローなのかは別として、ともかくそれはモデルであり、典型である。とりわけアブラハムとその家族(妻サラ、侍女ハガル、その子イシュマエル、サラの子イサク)がモデルであるような人びとにとっては、それは自己同一化や自我理想のモデルである。

實在の人物とみなすか、物語上の人物とみなすかは、じつは大きな違いがあるが、その物語が聖書という特別の物語、あらゆる物語の準拠となる大文字の物語である以上は、ある意味ではそれほど変わらない、というのも、實在性は歴史的事実性であり、その「歴史」とは原理的に語られた物語であった、それも特権的な大文字の物語なのだから。

その物語を共有する人びとにとって、アブラハムの物語は起源の物語だ。その物語を記憶すること、それがかれらのアイデンティティの準拠となる。ただしこの場合、アイデンティティは共同的で、この記憶の共有が〈共同体〉を作り支えることになる。

その意味ではユダヤ人もアラブ人も〈記憶の共同体〉である。それは、ユダヤ人とアラブ人がそれぞれの記憶を共有する共同体だということを意味するだけでなく、両者が同じ物語を分かちあう共同体だということをも意味している。だから起源の物語に訴えるなら、この点では「神の子イエスによる贖罪」を記憶の中心におく(というよりトラウマとする)他の

キリスト教諸民族より、この二つの民族は互いにはるかに近い絆で結ばれているのだ。

ユダヤ人とアラブ人は、まさに共通の記憶によって分離されている。あるいは系譜的な分離を共有している。一方はイサクの末裔、他方はイシュマエルの末裔で、父はともにアブラハムだ。だがこの分岐において、双方に何が帰結するのか、あるいはこの分岐はどんな隠された構造を秘めているのか、そしてその構造から何が帰結するのか、ライヒ&コロットの作品からは離れるが、最後にこの点をひとわり確認しておきたい。

もう一度聖書をつぶさに読んでみよう。

アブラハムの妻サラには子供ができなかった。そこでサラは侍女のハガルを夫に与え、ハガルによって一家の子を得ようとした(最初の代理妻?)。ハガルは妊娠するとサラを無視するようになったので、怒ったサラはハガルを虐げ、夫にハガルを追い出させる。砂漠で途方に暮れるハガルに神が現われ、おまえの子供はひとつの民の祖となるだろうと告げて、ハガルを家に帰らせる。そこで生まれた子供がイシュマエルだ。ところがしばらくして、神はサラが子供を生むことを告げる。アブラハムは半信半疑だし、老齢のサラはこれ聞いてを笑うが、はたして一年後、神が再び訪れてサラは子供を生む。それがイサクであり、かれがアブラハムの嫡男となる。そしてサラはアブラハムに迫り、イシュマエル母子を水さえもたせずに追い出させる。砂漠に捨てられ途方に暮れる母子に神が再び現われて、以前の約束を繰り返す、その行く末を保証する。

これが家族の物語のあらましが、その後聖書はイサク以下の一族の歴史をたどり、イシュマエルの末裔の事跡は記述の圏外に消える。ところでイシュマエルの母ハガルは、アブラハムがエジプトに逗留し、サラを妹と偽ってファラオに差し出したとき、神の怒りに遭ったファラオが、アブラハムとサラに与えた侍女であり、彼女はエジプト人だから、イシュマエルはヘブライ人とエジプト人との混血だということになる。そして今でもスエズ運河沿いにあるエジプトの町イスマイリアにその記憶をとどめているが、それがアラブ人の祖だとされている。

この物語から、家父長的と言われるこの一族の発端に、神の言葉を笑ったり、夫に命令したりする

豪気な妻がおり、家長たるアブラハムは、じつは一家のことに關してはほとんど妻サラの言いなりになっている、といった側面を読みとることもできる。だがそれよりもここで興味深いのは、イシュマエルとイサクのそれぞれがアブラハムを父としながら、その〈父との関係〉が微妙に、しかしきわめて意味深長に異なっているということだ(これはチュニジアの精神分析家フェティ・ベンスラマの指摘による)。

『創世記』に明記されているように、イシュマエルは、サラの指示によってアブラハムがハガルと同衾することから生まれている(「アブラハムはハガルの所に入り、ハガルは身ごもった」第16章)。ところがイサクはアブラハムとサラとの性行為によって生まれたのかどうかは明らかでない。むしろ聖書の記述によればイサクは、神が生殖能力のないサラに産ませた子である。神はアブラハムに言う、「わたしは彼女(サラ)を祝福し、彼女から一人の子をおまえに授ける」(第17章)。そのときサラは100歳を超えており、アブラハムは神の言葉が信じられないのだが、神はもう一度訪れて言う、「来年の今頃もう一度おまえのところに戻ってくる。そのときおまえの妻のサラに子が産まれるのだ」(第19章)。その言葉を老齡のサラは笑いさへす。だが神は念を押し、去ってソドムを滅ぼしに出かける。そしてやがて、神が予告したとおりサラは身ごもる。「ヤーウェはその言葉の通りにサラを顧みたまうた。そしてサラにその語られたようにされた。そこでサラは身ごもり、アブラハムに、その老年におよんで一人の男子を産んだ」(第 20 章)。

アブラハムが神の言葉を信じられず、サラがそれを笑いさへすのは、二人がもはや子供を産む現実的条件をもっていなかったからだろう。にもかかわらずサラは子供を産む。それは神がサラを訪れ「サラを顧みたまうた」からである。つまり、イシュマエルは人間の配慮と営みによって生まれたのだが、イサクはそうではない。産むはずのない人間から、イサクは神の介入によって生まれたのである。そこで思い出されるのはマリアの処女懐妊だが、イサクの誕生に關してアブラハムはちょうど、イエスに対する大工ヨゼフのような立場にいる。というより順序は逆で、イエスの誕生の物語はこのイサクの出生の事情をなぞっているのである。

するとここには〈父〉をめぐる重要な相違が刻まれ

ていることになる。イシュマエルにとってアブラハムはいかなる意味でも〈父〉だが、イサクにとってアブラハムが系譜上の父親であるとしても、イサクをサラに産ませたのは神であり、その意味では神がイサクの〈父〉である。言い換えればイサクは「神の子」であり、アブラハムという父親は限定的な意味でしか〈父〉ではなく、その背後に全能の神という〈父〉がいる。それに対してイシュマエルの誕生には、神は直接には関与していない。だから逆にイシュマエルにとって、父親アブラハムが全幅の意味での〈父〉なのだ。

このことは、兄弟のそれぞれを起源とする民族の信仰にとって大きな帰結をもたらすことになる。イサクの背後には〈父〉としての神がおり、その意味ではかれは「神の子」で、父親アブラハムを超えた〈義〉を担っている。だからイサクは父親アブラハムによって祭壇に捧げられても、アブラハムはこの息子を抹消することはできないのだ。そしてこのことはユダヤ教よりも、イサクの反復によって一神教を更新したキリスト教においていっそう重い意味をもつようになる。ここでは父親の権威は限定的で、〈子〉は現実の父親を超えあるいは否認して神の義につくことができる。あるいは、あらゆる〈子〉(つまり万人、というのも万人はだれかの子だから)は神とつながれている。

ところがイシュマエルは純然たる人の子だ。アブラハムとハガルとの間の、人間の営みが生んだ子である。神はこの系譜的三角形(父、母、子)の外にいる。だからイシュマエルの一族にとって、神(アラー)は「生みもせず、生まれもしない」隔絶した絶対者であり、人間世界の展開にとって神は基本的には何の関わりもない。ただしその代わり、地上の生活は人間の責任に委ねられ、父親は地上の生活において十全な〈父〉として威力を振るうことになる。

要するにこの物語は、ユダヤ=キリスト教的〈父〉とイスラーム的〈父〉との相違を刻んでいる。神的な〈父〉と地上の〈父〉、そして父なる〈神〉と系譜外の〈神〉、その二つの絡んだ在りようと、そこから帰結するあらゆる規範的構成とが、〈一神教〉という一枚の制度的織物の、二つの面の絵模様を作っているのである。 \*

にしたに・おさむ—1950年生まれ、明治学院大学文学部教授、仏文学/思想、著書=『不死のワンダーランド』(青土社)、『戦争論』(岩波書店)など。